平成9年4月14日 (Ver.1.0.2)

設置審用個人調書（様式4）履歴書, 業績リストの記入要領

資料はこの手引きに従ってワープロ等で作成し,「ハードコピー」,「3.5”フロッピー・ディスク」,「電子メール」の3つの媒体で提出していただきます.

[ハードコピーの提出方法]
ワープロ入力したそのままの型式で結構です（見本の様式にする必要はありません）. ただし,「外字登録が必要な文字」,「上付き, あるいは, 下付き文字」,「数式や特殊記号」には赤でマークを付けて下さい.

[フロッピー・ディスクの提出方法]
フロッピー・ディスクには, 1) ワープロ等で作成されたデータ, ならびに, 2) これらをテキストファイルに変換した後, 次表のファイル名（半角文字）で

	ファイル名
履歴書	4-1.TXT
教育研究業績	4-2.TXT

セーブしたものを提出してください. またフロッピーディスクには,

1) 氏名,
2) ご利用の計算機環境 (Windows,Mac,UNIX 等),
3) ワープロソフトの名前とバージョン

を記入したラベルを添付してください. なお, 最初からテキストファイルとして作成された場合は, ワープロ等のファイルに相当するものは不要です. この場合, ワープロソフトの名前の代りに「不使用」と記入してください.

[電子メールの提出方法]
フロッピー・ディスクに作成した2つのテキストファイルを, それぞれを別のメールとしてお送り下さい. メールの Subject (あるいは 件名, 題名, etc.) は, joho4-1 ないし joho4-2 としてください.

電子メールの宛先は, `moris@kuis.kyoto-u.ac.jp` です. お手元にもお送りになられたメールのコピーをお残しください.

1 履歴書作成上の注意

記入の手引き（別紙 1）に従って作成してください. 記入例を別紙 2 に示します. 以下に記入上の注意を示します.

1. [履歴書欄]
   年齢は就任時（平成 10 年 4 月 1 日）における満年令を生年月日の横に（4 0才）のように記入してください.
2. [学歴欄]
   大学もしくは高等専門学校, またはこれらと同等以上と認められる学校卒業以上の学歴を有する方は, これらの学歴, ならびに学位, 称号を全て記入してください. その他の方は, 最終学歴および学位, 称号について入力して下さい.
3. [職歴欄]
   - 職歴の全てについて記入し, 職名, 地位等につても明記して下さい.
   - 過去の外国出張歴で, 1カ月以上渡航したことのある方は, 国名, 機関名, 現地での職名を記入して下さい.
   - 教員資格審査を既に受けられた方は, 判定結果をご記入下さい.

資格認定を受けた組織	結果の記入項目
本学工学研究科	総務課からの別途配布資料に従って記入
他大学または他学部	当該審査にかかる審査の年月, 大学名, 研究科名・専攻名・修士または博士の別（または学部名・学科名）, 職名, 専任・兼担・兼任の別, 担当授業科目名（大学院にあっては, 判定結果を含む）を記入
教員審査を受けておられない方	記入不要

なお判定結果は, 専任教員の場合は「まる合」,「合」のいずれか, 非常勤講師の場合は「可」と思われます.

4. [学会及び社会における活動等の欄]

   平成 9 年 4 月 1 日現在活動中のものについて, 活動開始の年月, 学会名等, 役職（会員等）を記入します. 過去に理事・評議員等をされた方は, その期間も記入してください.

5. [賞罰等]

   該当しない場合には「なし」と記入して下さい.

6. [職務の状況欄]

   博士前期課程, 博士後期課程, 学部に区別して, この順番で現在の担当科目ならびに専任・兼担・兼任の区別, 毎週担当授業時間数を記入して下さい.

   この際, 専任・兼担・兼任の区別に関しては, 次表にしたがって対応する記号を記入してください.

	専任	兼担	兼任
記号	A	B	C

   毎週担当授業時間数は以下の注意にしたがって計算して下さい. なお, 総務課より別途指示があった場合はその指示にしたがってください.

   (a) 毎週担当授業時間数は 1 週間の担当授業時間数を通年に換算して表記します. 例えば半期 2 単位の講義の場合, 毎週担当授業時間数は 1 となります.

   (b) 複数の担当者で行われる授業に関しては, 通年に換算のうえ担当者全員で除した時間数を記入願います。

   例 1: 前期 2 単位の授業を 4 人でリレー講義は 0.25
   例 2: 通年 2 単位の授業を 4 人でリレー講義は 0.5

   (c) 実験・実習, セミナー, 卒業研究等については数人で担当されますが, 常時, 学生を指導している状態であろうと思われますので, 担当者全員で除さなくて結構です. 実態に合わせて時間数を計算してください.

シラバス上で通年２単位の授業を３人で担当の場合, 以下のような例が考えられます（これ以外の組み合わせもあります）.

講義形態	時間数
１人が前期担当, ２人が後期に等分のリレー講義	前者は１, 後者は 0.5
３人が通年で別の実験実施	全員 2

また大学院の場合には, これらの科目は個別指導が実態と思われますので, 学生一人当たり先生一人, つまり, 一クラスを一人で担当するという計算をしてください. ただし, 学生二人を担当する場合でも単位数を倍にすることはできません.

(d) 卒業研究の単位数がゼロの場合は, 卒業研究は記入しないで下さい.

(e) １週間あたりの授業時間数は １０～３０になると思われます.

2 研究業績調書

記入の手引き（別紙 3）に従って作成してください. 記入例を別紙 4 に示します. 以下に記入上の注意を示します.

教育研究業績をテキスト型式で保存する際のファイル名は 4-2.TXT としてください.

1. 研究業績について全て調査頂き,「著書」,「学術論文」, およびこれらに属さない物（「その他」）に区分して, 最近５年間（主要なものについては、５年以上でも構わない）について, 古いものから順に記入してください.
2. 「学術論文」はレフリーのある雑誌等に掲載されたものに限ります.
3. 研究業績は,「著書」,「学術論文」,「その他」の順に記入し,「著書」,「学術論文」それぞれの該当論文等に個別の番号をつけてください. この際, 学術論文の番号は著書とは独立して 1 番から付けてください.
4. 研究業績の総数は原則として３０件とし, 最近５年間のもので３０件に満たない場合は, ３０件になるまで過去に遡ることができます.

5. 記入項目は,「著書・学術論文の名称」,「単著・共著の別」,「発行又は発表年月」,「発行所・発表雑誌等又は発表学会等の名称, 巻, 号」,「概要（２００字程度）」および「掲載頁数」, さらに共同執筆の場合は「執筆者全員の氏名」（著書・論文に掲載された順で全て記入）

6. 外国雑誌投稿の場合、発行年月が不明と言われる先生もおられますが、調査の上、必ず記入願います。不明のものは「その他」に含めてください。

7. 投稿中、印刷中の場合は、受理証明を添付する必要があります。受理証明が取得できないものは、その他に含めてください。

8. 執筆者が多数の場合は, その旨明記して（例えば「執筆者２０名」等）, 氏名の列挙を省略して結構です.

9. 受賞した論文等、重要なものは、５年以前であっても、含めていただいて結構です。

10. 学位論文は記載することができません.

別紙 1

履歴書記入の手引き

履歴書の記入方法は別紙 2 の例を参考にしてください.

履歴書は, [氏名],[性別],[本籍地],[生年月日],[現住所],[学歴],[職歴], [学会及び社会における活動],[賞罰],[勤務先],[職名],[学部学科等], [担当授業科目] の項目からなっています.

例に示すとおり, 各項目に対応する内容は [ ] で括られた項目識別子の次の行から記入し, 項目間には1行分の改行（空白行）を入れます. この空白行により項目の区切りを識別しますので, 不必要な空白行がはいらないようご注意下さい.

なお記入に際しては, 以下の2点をお守り下さい.

数字, 英字は半角文字で入力
半角カタカナ ならびに全角スペースは使用しない

その他の注意を以下に示します.

★ 過去に教員審査を受けられた方は, 職歴に「教員資格審査において教員資格認定」に関して以下の記載が必要です.

昭和/平成○年×月　教員資格審査において教員資格認定
（審査結果）

（審査結果）の記入例を以下に示します.

（A大学大学院B研究科C専攻（博士課程）助教授（専任）（博士前期課程）ＤＤ工学、ＥＥ実験、ＦＦ工学特別実験及び演習第一、第二、（主たる研究指導分野）ＧＧ工学の理論・解析・制御及び応用）まる合

★ 担当授業科目の記入に際しては以下のフォーマットで記入してください.

科目名 改行
専任・兼担・兼任の区別 SP 毎週担当授業時間数 改行
科目名 改行
専任・兼担・兼任の区別 SP 毎週担当授業時間数 改行
....
（以上 開講大学部局学科名） 改行
改行

1. 改行 のある所のみ改行してください. それ以外は続けて入力してください.
2. SP のある所は「半角スペース」を入力してください.
3. 異なる大学・部局・学科/専攻との間には1行分の改行を入れてください.

別紙 2　履歴書記入例

［氏名］
京大 太郎 （キョウダイ タロウ）

［性別］
男

［本籍地］
京都府

［生年月日］
昭和 19 年 12 月 2 日 （52 才）

［現住所］
京都市左京区吉田本町１丁目３番地の１

［学歴］
昭和 41 年 3 月 京都大学工学部 ABC 工学科卒業
同 43 年 3 月 京都大学大学院工学研究科修士課程 ABC 工学専攻修了
同 43 年 3 月 授 京都大学工学修士
同 46 年 3 月 京都大学大学院工学研究科博士課程 ABC 工学専攻研究指導認定退学
同 46 年 9 月 京都大学大学院工学研究科博士課程 ABC 工学専攻修了
同 46 年 9 月 授 京都大学工学博士

［職歴］
昭和 46 年 4 月 ○ × （株）ABC 部入社
同 47 年 3 月 同 退社
同 47 年 4 月 京都大学助手 （工学部）
同 48 年 4 月 京都大学講師 （工学部）
同 48 年 4 月 京都大学大学院工学研究科の担当を命ずる
同 49 年 10 月 アメリカ合衆国テキサス大学客員研究員 （昭和５０年９月まで）
平成 3 年 4 月 京都大学助教授（工学部）（現在に至る）
同 6 年 11 月 教員資格審査において教員資格認定
（京都大学大学院工学研究科 ABC 工学専攻 （博士課程）助教授 （専任）
（博士前期課程）DD 工学、EE 実験、FF 工学特別実験及び演習第一、第二、
（主たる研究指導分野）GG 工学の理論 ・解析 ・制御及び応用）まる合
同 7 年 10 月 フランス国パリ第七大学客員助教授 （平成８年３月まで）

［学会及び社会における活動］
昭和 46 年 4 月 日本 ABC 学会会員
同 50 年 4 月 日本 ABC 学会 「ABC 推進」研究専門委員会委員
同 60 年 4 月 日本 ABC 学会雑誌編集委員
平成 3 年 4 月 日本 ABC 学会近畿地区幹事
同 5 年 10 月 DEF 学会会員

[賞罰]
昭和48年7月 日本ABC学会若手奨励賞受賞
同59年10月 パリ科学アカデミー若手奨励賞受賞
平成3年10月 ベルリン科学者協会フェロー （ドイツ）

[職務の状況]
[勤務先]
京都大学

[職名]
助教授

[学部学科等]
工学研究科

[担当授業科目]
ABC工学1
A 0.5
応用ABC実験
A 1.0
ABC工学特別実験及び演習第一
A 4.0
ABC工学特別実験及び演習第二
A 4.0
（以上 大学院工学研究科ABC工学専攻博士前期課程）

ABC工学特論
A 0.2
（以上 大学院工学研究科ABC工学専攻博士後期課程）

ABC工学特別実験
A 6.0
（以上 工学部ABC工学科）

物理学
B 1.0
（以上 医療技術短期大学部）

物理学1
C 1.0
電子工学A
C 1.0
（以上 ○×大学工学部AB工学科）

別紙 3

教育・研究業績記入の手引き

著書, 学術論文, その他の記入フォーマットは以下の通りです. 著書あるいは学術論文を2件以上記載する場合は, 前の論文との間に1行改行を入れてください.

```
(氏名) 姓 SP 名 改行
改行
[著書] 改行
番号. SP 著書の名称 改行
＃単著, 共著の別 改行
＄発行年月 (発行年は昭和あるいは平成で記入してください) 改行
％発行所 改行
￥概要 (200字程度), (掲載頁), 共著の場合は共著者名 改行
改行
[学術論文] 改行
番号. SP 学術論文の名称 改行
＃単著, 共著の別 改行
＄発行年月 (発行年は昭和あるいは平成で記入してください) 改行
％発表雑誌等または発表学会の名称, 巻, 号 改行
￥概要 (200字程度), (掲載頁), 共著の場合は共著者名 改行
改行
[その他] 改行
＃著書 SP 件数 改行
＄学術論文 SP 件数 改行
％その他 SP 件数 改行
```

- ＃＄％￥の印は必ず全角文字で入れて下さい.
- 改行のある所のみ改行してください. それ以外は続けて入力してください.
- SP のある所は「半角スペース」を入力してください.
- 表組や罫線の挿入はしないでください.
- 数字, 英字は半角文字で入力してください.
- 「(氏名)」, 「[著書]」, 「[学術論文]」, 「(123～132頁)」などの ( ), [ ] は全角文字にしてください.

別紙4　教育・研究業績記入例

（氏名）京大 太郎

[著書]
1. 現代病理学体系　腫瘍 2
#単著
$平成4年6月
%中山書店
¥腫瘍が生体に存在することによって宿主に起こる様々な異常を、腫瘍におけるホルモン産生を中心に述べた。(889~894頁)

[学術論文]
1. A Thermodynamical Viewpoint on Nerve Pulse Dynamics
#共著
$平成6年1月
% J. Non-Equilib. Thermodyn., Vol.19
¥いくつかの数学モデルにおける回復変数を比可逆熱力学の内部変数として再解釈することによって、熱力学的に許容される神経パルス挙動のモデルを構築した。そのモデルは、安定した基底上のソリトンや散逸構造を示すことができる。(9~23頁) T.Kyodai, I.Oosaka (共同執筆)

2. Psudomomentum in Continuum Physics-Newtonian Versus Eshelbian Vision
#単著
$平成6年2月
% Bull. Tech. Univ. Istanbul, Vol.47
¥Peierls によって考案された物理運動量と擬運動量の概念を非線形連続体力学に適用した。ニュートン力学を補う Eshelby 力学を導入して、擬運動量の保存則を破壊、損傷力学、連続体力学の正準ハミルトニアン定式化、動的微小ひずみ弾性論とフォノン、電磁気運動量と光子の定式化の問題に応用した。(23~29頁)

3. The Dynamics of Configurational Forces at Phase-Transition Fronts
#共著
$平成7年3月
% Meccanica, Vol.30
¥物質多様体と逆運動に基づく運動学的連続体理論を用いて、固体中の相転移の挙動を定式化した。動的な運動方程式は熱弾性導体に対する擬運動量の非平衡方程式である。相転移面における準非均質性に付随する仕事が、運動エネルギーではなく内部エネルギーから

計算される Eshelby 応力の垂直方向の跳躍に関連していることを示した。(605 ~ 619 頁)
京大太郎，志賀一郎　(共同執筆)

[その他]
著書 15
学術論文 3
その他 0